

デザイナーは日々新なり—英恵森さんの仕事の信条

今月は先にお亡くなりになったデザイナー、森英恵さんと聖心女子大学教授、鈴木秀子先生の対談（雑誌致知より抜粋）を紹介いたします。

（鈴木）

人間は着るものによって変わるものってございませぬ？例えば武道などでは形を変えることから始まりますし、女性なら着物を着ると、立ち居振る舞いまで女性らしくなったりすることもありますでしょう。ですから人間は自分で衣服を選んでいるように思いますが、逆に衣服から無意識に影響を受けている部分もあると思うのです。

（森）

ありますね。ただ私が手掛けてきた「洋服」という存在は西洋の暮らしの伝統の中で育まれてきたものですから、ライフスタイルの違う日本の暮らしに合う洋服をつくるということは最初、なかなか難しかったですね。

（鈴木）

そもそも森先生がこの服飾デザイナーの道に入られるきっかけはどのようなことになりましたか？

（森）

父は島根で開業医をしていました。なかなかセンスのいい人だったといまは感じています。母は料理が上手で、子どもたちをかわいがる人でした。私は5人きょうだいの下から2番目で、男が2人で女が3人。当時ですから、家の中では男が大事にされていました。一番上の兄が東大の医学部に入ったので父はとても喜びましてね。二男も東京の高等学校に入りたいといって、田舎から東京へ大工を送って家を建てさせたんです。一方、女は女らしく育てたいということで、今度は姉が跡見女学校に入れられました。

（鈴木）

その頃跡見といえば女子教育では一番でしたものね。

（森）

3人が東京で、私と妹が島根に残りました。母は行ったり来たりしていましたが、幼い娘2人に母親不在のような形では不憫だと思ったのでしょう。小学校4年生の時、私たち2人も上京しました。

(鈴木)

それではお父様お1人が、島根に残られたわけですか。いまで言うところの逆単身赴任。

(森)

医者として地元への責任がありましたからね。いまでは小学校4年生まででも田舎で育ったことは、とてもよかったと思っています。外から刺激がないから、割とピュアに育っていきましたね。水もきれいでしたし、緑もたくさんあって、何より四季の移り変わりが素晴らしかった。蝶はハナエ・モリデザインの象徴と言われますが、美しい蝶を描けるのも、子どもの頃、田舎でたくさんの蝶を見てきたからだと思っています。

(鈴木)

心理学では、人生で自分が大切だと思えるものは5歳までにどういう環境で育ったかで影響を受けると言います。そういう意味でも、森先生は非常に恵まれた環境で、素晴らしい影響を受けてお育ちになられたのですね。他に人格形成で影響を受けた方はいらっしゃいますか。特にこういう人のこの言葉に影響を受けられたとか。

(森)

そうですねえ……。女学校の時、校長先生が「日々新」という言葉を教えてくださいました。

(鈴木)

中国古典の『大学』にでてくる言葉ですね。

(森)

その時はなんか野暮ったい言葉のように感じましたが、いまはとても大事にしています。ファッションデザイナーという職業は、少しばかり時代を先取りしながらつくっていく仕事ですからね。また、もちろん仕事もそうですが、精神面でも毎日をリフレッシュしながら自分を探すという意味で、いい言葉だと思うようになりました。

(鈴木)

森先生のように創造というか、クリエイティブなお仕事をされる方にはこれ以上はないというくらいピッタリの言葉ですね。

(森)

確かに時代を先取りする仕事ですが、あまり先取りしすぎてもダメなのです。人間がどんなふう生きていくかということ、少しばかり先取りして形にする。だから本当に「日々

新」な仕事です。

このお話を伺うと、森さんのデザイナーの原点は幼児期の感性が元になっているのだと思います。ですから、木田幼稚園のお子様達はビオトープや園内の小動物と過ごす事で自然からの「不思議の力」を借りて、その子、その子の感性が育んでいます。

また、「日々新」と結ばれていますが「日々これ新たなり。すなわち日々これ好日なり」からとられた言葉です。これは、「一日一日を心新たに明るく生きれば、それはすなわち、一日一日が充実した人生となる」という意味から来ています。

私たち大人もお子様のように「日々新」に生きていきたいものです。

理事長